

朝夷巡嶋記

初輯

三



^ 13
3568
3



門 13
號 3568
卷 3

朝夷巡嶋記全傳卷之三

東都 曲亭主人編輯



初輯第五

絲の素れの幡太薄
催死ま秋の蟄居

痛しうる範頼朝臣の生涯の大厄難この日小逼りて釜中の魚屠所の
羊となるより此れもあはれけり時政が好意を謙倉殿の御疑念釋
稍恩免のち使とめりまけりと思ひとりて老臣ホが練を聴きて生平よるも
いと甚やかし後者さへは装いと營中へ赴死めりハ時政が誓わりの相毛
三郎重成兵士駭後へ若宮巷路に出迎へ矢度又蒲殿土後を生かすと
推しり童兼倉殿の序役は伊豆の修善寺へ入るとなせりと重成仰成兼
このかゝるはとくは誇り多しといふがせり範頼と重成のあはれとて逆

朝夷巡嶋記全傳卷之三

早稲田 大學 図書館
昭 34.6.3 受
藏 書

心る。何のめがまじし掠めく再度のめん咎を蒙りけん。さむゆかくゆの推察
 きたく。ちん疑ひをまう。解べ。枉く途我も死にへ用死にへ。と。これに
 声さるゆ。くり返す。勸解。ま。箱毛三郎。冷笑。ひ重成。か。く。ひ。へ。へ。
 ころ。先へ。一歩。も。放。し。あ。わ。さ。さ。べ。う。も。あ。ら。ざ。り。て。も。ま。ま。の。導。言。ま。ま。の。と。
 いうゆ。く。窘。み。ぬ。浦。敷。の。る。は。辞。を。盡。し。と。和。解。ん。と。の。箱。毛。三。郎。後。方。小。柄。り
 た。は。大。夫。属。重。能。の。遠。く。進。ま。ら。ず。主。の。袂。と。引。動。し。お。あ。る。べ。い。と。の。廣
 通。ホ。が。豫。て。の。り。や。ま。せ。し。の。の。期。は。及。び。て。百。千。遍。陳。の。の。由。な。死。所
 逆。謀。の。死。也。方。寸。を。明。し。の。ん。只。所。運。の。ま。ま。と。し。そ。ま。ひ。も。ひ。へ。と。密
 中。小。柄。り。が。浦。敷。頻。々。嗟。嘆。し。と。遂。に。焼。く。び。争。ひ。の。ま。ま。當。下。箱。毛。三。郎。と
 兵。士。ホ。を。促。し。と。早。せ。ま。ま。張。興。へ。宛。頼。朝。臣。を。後。し。乗。せ。と。く。行。き。と。

の。そ。が。立。ち。が。浦。敷。の。後。者。ホ。の。果。を。果。と。せ。ん。と。ま。ま。皆。の。如。小。柄。留
 せ。し。と。主。君。の。俱。み。と。ま。ま。の。ら。び。そ。が。中。小。重。能。ホ。老。堂。正。右。堂。六。七。人。上。の
 先。途。死。す。と。ま。ま。の。あ。く。腹。切。ら。ん。と。の。こ。を。彼。必。死。の。面。理。梅。を
 か。く。や。思。ひ。し。ん。重。成。僅。と。ま。ま。の。死。許。し。と。興。の。後。方。は。立。せ。と。現。入。向。の
 栄。枯。得。失。今。ふ。そ。の。あ。ぬ。る。の。ら。び。が。ま。の。の。幕。下。の。連。枝。と。く。車。馬。門。前。は
 市。致。る。に。在。鎌。倉。の。大。小。各。愛。敬。渴。仰。せ。ら。る。ゆ。ま。く。け。の。美。里。の。囚。後。と。
 かの。ま。ま。の。さ。ら。の。恩。顧。の。の。の。由。憂。死。共。と。ま。ま。の。稀。め。と。親。し。死。武。者。の
 兄。と。と。と。裕。と。の。ひ。恰。と。の。ひ。歎。死。真。蘇。枋。の。驚。世。尾。花。が。袖。は。お。の。の。
 乾。く。隙。多。死。杖。の。天。か。り。果。る。族。宿。し。と。足。柄。越。よ。その。夜。と。明。次。乃
 日。の。文。た。え。と。修。善。寺。へ。ち。の。ん。の。あ。ら。り。箱。小。柄。の。宿。へ。別。れ。死。

間のほろりふる橋太丸馬違ふく治部をいふやとわかく遠く近うて
 左邊の和殿も彌君のちん往方をあうさし居軟否彌君のちんあうさし
 ちんあうさしとて有友さうさうと侍女們は尋問の量めあやれ式士二人夫
 人を小腋に抱え走り去らんとき居軟ふち側は侍りて専女小色後女の
 童命死限す小禁几ハ件の癖者些中騒ぎ居これの安達盛長ぬ。懸念殿は
 密にちんあうさし受多ひく。幡太の方を逐ふ好むとのいひあつて近づく
 の蹴蹴ちんあうさし外面へ去去ぬと告げよいの安うさし居て彌君のいふさ
 と同じもさし居る終る。とのいひ高保うち驚き安達氏の夫人のちん親家
 ろのいひさうさしあうさし彌君さうさし奪れて死して由不光の罪の脱は敵内
 外は元端と刺猛火小包をてんが落しあうさし居てあうさし偏は夫人彌君は
 自殺を勧めたり死出三途のちん傷死せんといふあうさし甲斐由る。このは

ちんあうさし死ん今下戦懸散しちんあう往方を常備やとのいひ有友いふや及
 ちんあうさしちんあうさしとて西側へ尾をさしと居る長押を薙刀にて受て
 倒せ散散と散る火花は似る葉武者も桐の中は乱入し替んとて居るを
 高保有友左右に受あうさし二人齊一閃を刀の下に彼軍兵が首にたぐ
 礮と居るもの列した大刀風は居燃うる火気痛くあうさし居ると寄りの
 軍兵は居行けと追鬼の前面に居る梁木治部居る首をうて半
 身既焼爛と居居ると高保の養子は足残喘むとて火燭の中は
 礮と坐あうさし朽きやと念やと送よ声のからせども腹切の隙もあうさし居
 あうさし一世の功名も夢のゆへにとて居る。是や長安三月の煙を燃む西老
 黨の数奇然盡せし大厦とも不灰燼と居るさうさし失ぬけりてかうさし居る
 ちんあうさし野備杖照時の廣度馬を乗させ兵士は令さるお敵との



月鏡初編

あつた
まじり
敷俊と
助七
敗るを
備へ
の方
後と



伊藤

伊藤朝九郎

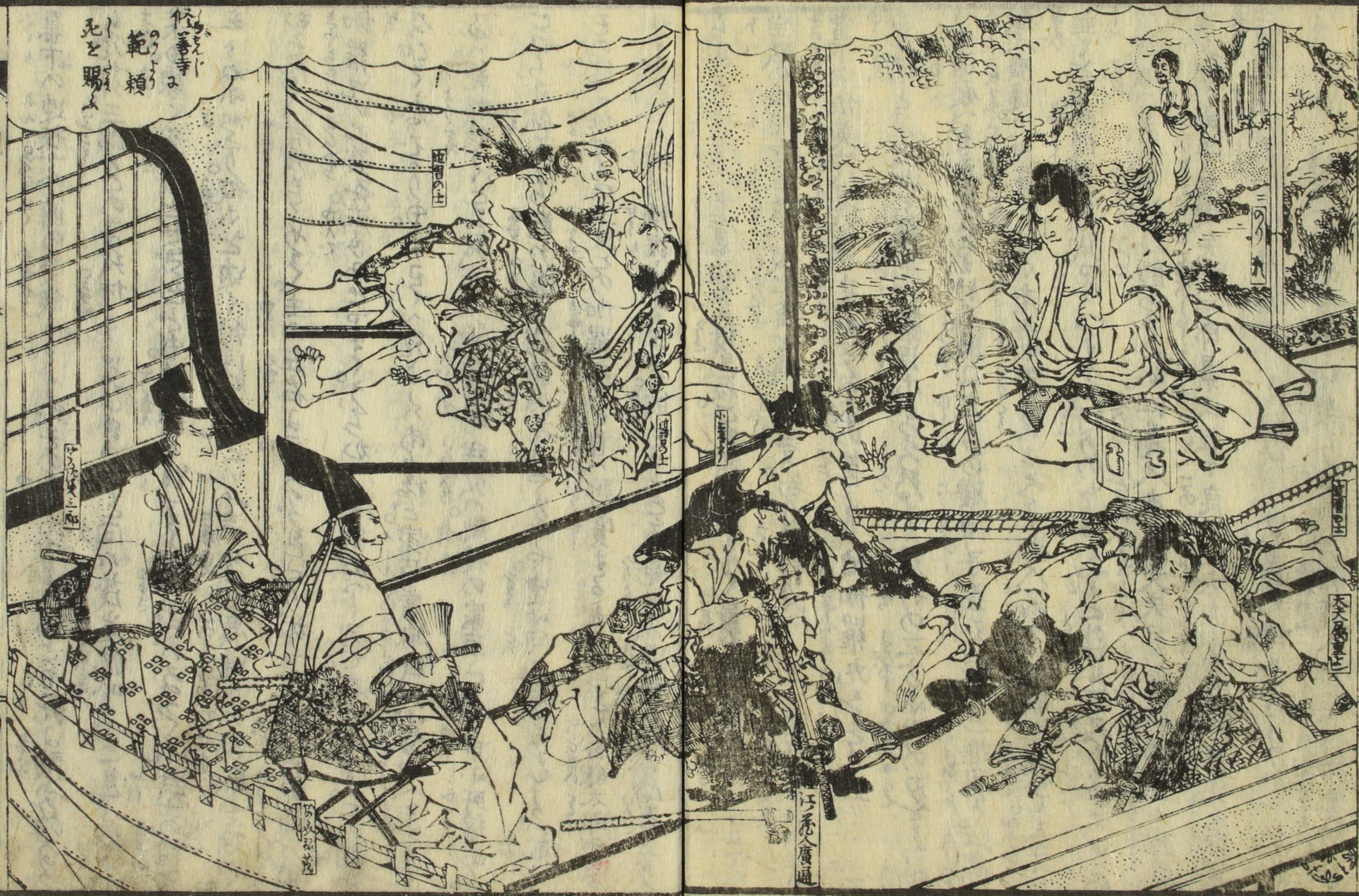
こころを躬方小あふぬいとあやうげなる武者一人薄間之屋女房を小腰に
 楚と抱えり。奥より走り出づ矢庭小遮り留させその未だ成尋に六彼
 武者騒ぐえくる。これハ安達藤九郎盛長が家隼小伊度勘九郎敦俊と
 のみの浦敷のちんちんハ今更のいぬ及びびとさよハ夫人幡太の前ハ則主人
 の愛女ハ白鳩丸ハ外孫とものかきもこの世母子の命乞をせむやとて切みかえ
 所領ハかえ只管勤死せうせうハ謙倉殿聞食勇士も老くハ恩愛及乃奴と
 たる。秋あられハ但白鳩丸ハ頼朝ハ仇とあつたりのなまの助命のよきあひの
 うけとてそが母ハ仔細る。照時ハ首を傳へよとて赦免状をさるる。よりて
 某ハこの條の火急の使者をうけりて王駿馬ハ鞭吹鳴らうとて當所へ
 馳着ハ合戦の最中たのむハ津波の起告はよハはらとてく遅とせが
 過失あらんとて思へハ鮎ハ潜入り辛くハ夫人を救ひ出さるるをせしと速
 終ハ衣領ハ掛る。赦免状をさるる。遅とんとする。後ハ照時ハ馬ハ下
 まで恭しく抱えり。かてハ河原ハ疑ハ死更團とて和郎一人俱ハあぬら
 せんハ心ハほ兵士ホハ送らせんとてハ敦俊ハ死揮合戦勝利とてと
 いふ。宗後の武士ハ殊伏せむとてハ今軍兵をさるる。多うとんとす。あ
 ら。某ハとてハ心ハとも。たてふ。うハと推辞てま。夫人ハ俱ハな
 らん。とのとせとも幡太の方ハ泣流く。後ハ一ハと呀夫ハ後ハ子ハ別れて
 形ハ死せむ。只ハ心ハ存命とて何ゆせん。そハ親の由とてハ隨ハ色
 と。あて。只ハこの終ハ棄てハ猛火ハ燒き果ゆたと聞召ハハ却させる
 咎ハあじう。といハあて。又ハ泣くハ敦俊ハ声を激ハ練ハ賺ハん。とて
 る。も。扶起ハ。遠ハ。外面ハ俱ハあぬら。とてハ照時ハを遠ハんとて。眠
 近ハ兵士のとて。前ハ立出ハ。一町ハ。とて。弓ハ金剛刺。

亦固め弦音をく弾ど射る矢坪違を敦俊ハ七九の命致うりかきせ小
 旗被く串れ苦と一声叫びあへばうら備小作さけり照時ハ兵士ホハ
 一人大刀を振翳しく。墓地又まきり懸り。敬篤刺つて久しき
 備太の方を捉く推伏おん頭致く死致す。立あがりんとする如次覆面あたる
 一個乃兵士並樹の落り走り出く。因て大刀風は彼軍兵が頭うち落。備太
 の方れおん頭ゆる共頭警短又引提て跡残暗し逃亡し。照時ハこき死ん
 彼脱まると主後四五人透間ゆわく追蒐しととの如法夜おれハ音ホ
 及む備太のよと敦俊が死骸を二竊小と隠させこの夕勢ハ沙汰さす
 兵士ホハ密詰り。又門内へ引かき照時がしるの中件ハ脱逃死兵士
 へ。おの終てわらまけり。かく高保有友ホ宗徒の兵士と討死し婦
 幼ハ煙又喫び火又燒まて死まほのいそむくそこの死をさす辛しと

脱るハ華兵ホホ希えり。さほ程ハ刀野備伏照時ハ兵軍兵と部して
 日持を獲索るハ猛火ハ燒まひるんこの如より落たり。とある責ハ
 へえざるにハ焚燒する火を滅さく。賊果る亡骸成此彼と展檢し
 備太ハ備門治部忠ホ宗徒の兵士の首級致齎し。勝関三ハ揚して營
 中へ集は程ハ天ハわのぐと明おけり。案下某生再脱範頼朝臣ハがり
 かけり。又さふ後若寺へ閉居る日影まつちた。病の病を置とらる
 かなめり。掃毛三郎重成ハその日よるを數兵ホしく。前後の門ハ固させ
 庫裡方丈客殿さ同ろの時たぐうち巡見す。も各ハ備積仏場。只
 彼地獄。異る。ど大夫属重能ホ近習の侍多死。あ。後。日。成。お。け。口。成
 因。死。る。慰。め。ら。う。い。や。か。る。ら。ば。主。後。憂。苦。日。を。か。き。終。く。五。六。日。を
 経。た。後。又。有。一。夕。更。闌。人。定。り。客。殿。の。塀。成。乗。越。す。た。り。入。潜。び。つ。る。の。

又云弘光為伴。さうあまうりふ。近々。恩奉の述ぐ。清履所ゆく。告
 せ。明日の鎌倉より。彼使入るのゆはあれ。寂期のおん供せまわく。て
 今朝より寺口。夜に。檜舟の。障紙。ゆき。や。あり。正首小
 告。ゆき。浦敷。毎。果。嘆息。直能。廣通。先見。智計。嘆
 賞。當麻太郎を罵るの。又せん。ゆ。か。けり。か。この。結。早。稻。毛
 三郎。夥。共。ハ。範。頼。朝。臣。の。近。臣。の。一。人。増。を。成。ん。く。ま。り。野。火。突。小。流
 人。廣。通。引。出。せ。ん。と。つ。つ。も。廣。通。ハ。此。中。動。ぶ。其。某。の。鎌。倉。殿。と。せ。る
 の。ある。と。知。る。は。荒。人。廣。通。方。り。主。の。寂。期。の。供。を。せ。ん。と。く。せ。る。と。来
 る。も。不。見。入。と。く。今。又。阻。ん。と。を。は。る。や。ある。と。と。つ。つ。来。つ。所
 と。た。入。り。寺。内。入。れ。る。を。も。と。り。各。位。中。息。慢。の。罪。脱。き。ご。こ
 けん。さ。で。も。勝。る。路。ある。や。と。同。様。れ。く。理。由。の。其。の。一。人。増。と。る

とも何程の。ある。あ。え。毛。を。つ。つ。海。成。水。ん。と。只。う。ち。捨。と。け。や。と。て。皆
 吐。け。退。る。ぬ。その。早。當。寺。の。住。持。の。常。も。の。町。噂。の。浦。敷。主。後。次。管。待。て。て。か
 う。執。居。の。憂。苦。を。憂。め。と。て。さ。う。今。日。の。鎌。倉。より。彼。使。来。臨。あ。る。は。た。は
 豫。く。その。沙。汰。し。た。ら。ち。當。り。の。在。せ。ば。若。つ。た。と。村。又。お。焦。燥。さ。せ
 る。ひ。け。る。と。お。ん。浴。さ。う。知。る。と。ど。當。寺。の。温。泉。ハ。萬。病。治。さ。と。は。山。門
 の。前。の。川。の。真。中。より。漏。れ。出。独。鈷。の。湯。と。い。は。せ。り。高。野。の。大。師。當
 國。小。券。縁。の。わ。ら。う。この。地。の。温。暖。た。る。が。わ。く。四。民。ま。く。温。毒。を。か。び。た。り
 情。て。真。の。岩。窟。小。引。籠。り。加。持。ち。あ。ま。七。日。七。夜。合。て。獨。結。を。投。身。の
 この。山。川。小。像。と。さ。う。其。処。より。温。泉。漏。れ。り。その。後。里。入。石。を。り。く。大。死
 る。獨。結。造。り。件。の。温。泉。の。ほ。と。と。小。立。と。云。と。名。け。り。偏。小。大。師。の
 大。切。徳。を。さ。と。め。る。お。わ。ん。加。以。川。の。上。下。知。ら。ぬ。湯。あ。る。と。石。を。置。て。湯



修善寺の
範頼
死を賜ふ

月夜刀篇卷三

後までも東門は眼掛く入るようありて先靈誠を盛とく不事と殺せと
 谷めりて幕下の子孫の寺の終末なるのありてやせん悲し死するに麻はるふ
 朝推立る七首を覗つてやとよふと鬱憤を色小見さるり鳥の死ん
 とさるとたよその鳴よのとうまうく人の死んとさるとたよそのつとと
 かんこの君先見あふふあふ後と最期の金言果せるる是より十有二年
 経く元文元年秋七月十八日のうらとよ幕下の嫡男頼家朝臣に極北條ふ
 棄れてこの修善寺へ推籠らる浴室の中ゆく害母ては輪田応報もそぞ
 間話休題且々範頼ハ又祐茂ホゆるち對ひ女に死傳言今さう命を
 惜むののとやいらんそぞとまよかめあはは使又憑む一葉あり家臣江流
 人が不思議なほどはものあなれを紙鎌倉へ進ませむやとあひ合つと切ら
 さることもうらつけあはは憚あはは豫とより當寺の住持よまねおたね鎌倉へ齋

ましく披露く賜ひ給と他ゆるる宣へば祐茂茂光の共ふそれのつたの
 物なるとやあひつたまがととど當寺より進らるるのつと何ん
 ありぬくいと意まうせらうち点鼓そまゆく安堵あり西使にとけいと
 いひあむ白雲坊の袷の襟式推中々二三より祖たて衣の白た膚をあ
 つ彼七首をうち戴き刃を袖小巻そそく氷わくと刃尖を虎の肚へごと
 立小膝成衝く右のえ一文字小引めん鮮血さると漬りく雪と欺く白文衣の
 飾磨の紅裾と染たる後とせと廣通重能刃を逆み小技りちて腹
 かた切とみは箱は破見員半名栗元廣矢矧菊川五十良子季宗殿十文字小
 切るもあは或ハ亦刺ちが刺ちぐとぞ臥累は主後八人算を乱しく屍を
 秋葉の霜小散り免血ハ亦野逕の花小似たり三寸息絶さる萬事休を族鬼
 今夜いづの宿ふ入るんとあはは哀れかく祐茂茂光ホも浦島の

長聞之不堪哀悼。造於營而乞命。

幕下辱賜書以赦荆婦。盛長則使私率伊庭

敦俊傳救於照時。照時聽命不能阻之。竊

殺荆婦與敦俊嫁之于兵。是夕家臣江廣

通者不圖而與此抵觸。復怨於其後者而奪

去荆婦頭顱携來而告臣。於是乎肇知危臣

者蓋照時之徒也。然而私臆不敢處獻其首

二級以乞。鈇載。則荆婦首級也。一則照時

幕下裂然高斬。鋤奸解冤。臣死且不朽。古語

有之。叢蘭欲靜。秋風動之。賢君欲明。諛間蔽

之。悲乎哉。三致虎於市。則人人必信焉。告曾

參殺人。其母竟投杼。臣富附驥之功。之杜患

之。備狡兔已盡。良犬就烹。不及者亦如此。臣

臨終不知所。吉訴賊怨以遺詔。緇流。憲覽

不愆幸甚。

建久四年癸丑秋八月 源範賴再拜

とを繞る。現繞むりのゆめゆめ。世若くは面をあら。是を嗟嘆

せざる。頼朝卿へつくと聞る。眉を聳め。あつたる。なほ

あふ藤九郎のいふ。そと問せ。身が盛長の麻織。避く頼朝の死。愚息由誠。二

御鏡のど。その夜。さり。清教書。齋へ遣。敦俊。二人。小焼。ま。死

と人。ゆひ。我も。ゆひ。く。け。ま。い。ひ。ひ。が。清鏡。違。く。幡太の前。と敦俊。を

書。照時。の。底。測。ぐ。い。と。然。我。會。く。回。答。ま。う。せ。ん。ら。ち。点。び。る。ひ。つ。

はしむとよそのる照時がひつる闘戦既又捕利我ぬく。中火を
故く比安達が使走まじく津教書紙遞よせし。幡太の前を救ん
る。かろふべしゆいれど焼落て後骸るまも素早とるを存ん
と諭せども彼使者へ一切を致しけり。彼夫人を救んとて
煙を犯し猛火我凌れ後堂へといゆく。不果とて焼
亡しひたと実し。女告りて汝も云々と指示せし。お
奇怪のる照時我召よせしと辨せし。くつたまた
多し稲毛三郎うけ多り。遠侍人退出る。

初輯第六

截落ま刀野命
汝又返る湯島櫓

稲毛三郎重成が妻の頼朝卿の北の方政子の妹のけけは
時政が為ゆの女誓あつと。裕といひ恰といひ勢利ははく
めのみ青雲の楷榜ゆせん。志念我運ぶ由多く。又渠が
虎の威を藉といと無礼と。めのみ我おとさるん。
さる稲毛三郎の幕下の氣を平なると。刀野備杖
照時を召せといひ津錠我を中受まじく。遠侍へ退
る。固よりあふよ。あふよ。あふよ。あふよ。あふよ。
告中。この條の越我密中。小書。写り腹心の私率と。時政
ふぞ告りける。却後北條時政の女誓の稲毛が密書と。えん。あふろ
勿心安らと。恥て内室牧の方。如此とのる。そのあはし。ふせほ。と耳語の
牧の方。あはし。照時。このふが。後才。又重成の女誓。まじく。いづ。疎み。あふね。とも
後才一人の惜む。不足。口のみ。このた。彼人禁獄。あつと。せられて。呵責。あふ。あふ。



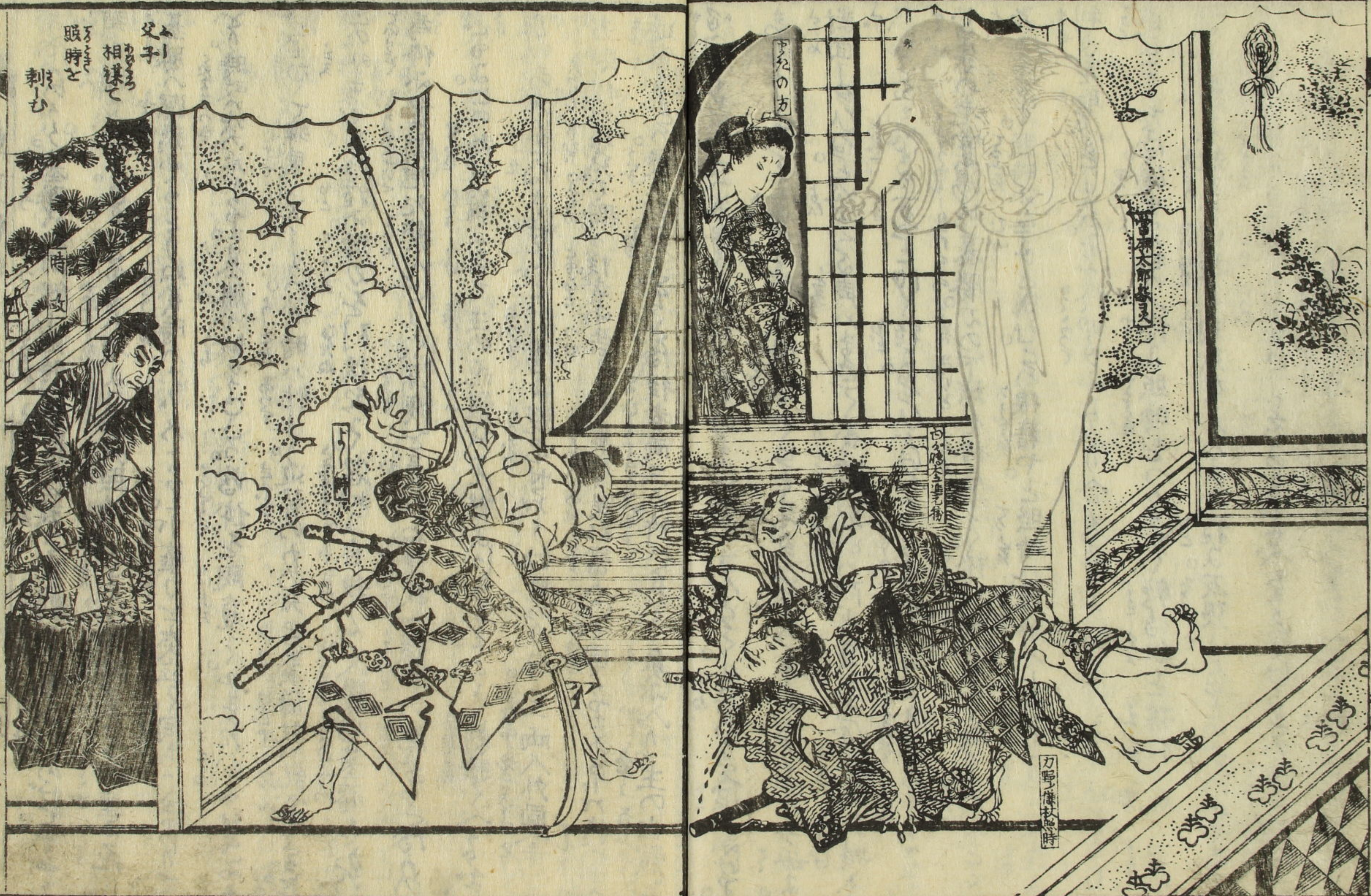
實我吐べ申し大それた事ふ及びびあんみづも深念し多しといふは時政沈吟し曩か
 の野儀杖を濱の宿の村にゆきとて猛は彼如へさう向ふ色しそのとれ安達其藤
 九郎の只顧小慈訴しく白鳩丸と幡太の前の命を乞ふ暮下り渠が
 女見する幡太の前のを免しく白鳩丸を赦す多しこの旨をゆめえさせし
 赦免状を賜りたるはゆめゆめゆるめぬ媚くもいそしく宿野へ退かぬ竊は
 おん角小告りくおん角且く尋思しく安達が女見幡太媛の世ふ人乃ゆえ
 ありと我のくその初美時が婦おせまほしとて此彼と媒めくも然るえ
 品をうへまぐ。婚縁我のひい入とて安達は一切義引きとていふは
 かくらふ小蒲殿へ進ませり。かれが今よの時をりく幡太の前を結果親乃
 安達よりため成んせし。透恨我をいふべたりの成さる後才の儀杖とて
 彼如の討ふ小清やうして遣る甲斐ある。いふ又計りあひ祐としかれ口
 説くもくもくも措きを腹くもいふのやまむ老堂湯も本進しとてや
 打立し時照時を追懸させし。核密を告計策を密せし小説示させし。その
 夜安達が使者のり共は彼婦人を結果や宿を復せしといふはそがこの先
 ゆく照時此も證據を取らてと。緯たや露頭をりく今さうおせんべゆ
 る。薄た氷成踏つとも。只成敗成時宜ふません。おん角をいふとやと
 向ハ眉根我うち軽車め。さうもてこの成空しく。儀杖は謀一あり母子の後悔
 多くそゆらま。コ子さう長時の才長たる男兒に相彈しくいふるやと
 時政うち巨匠及びぐらと出く美時を閑室の誘引の親子頼成つた合せ時政ハ
 件の疑もちのちく説示し計畧を求む長時めく嘆息し家その大人を
 動されの桃しく事成計りて人を擇せぬの秘にかる禍胎いで本意を曇め當
 麻を詐欺りて。管中お潜入せむいとも某彼如にさむいふら當麻と矢

庭の生拘られ鞠問せむとくその餘殃も大人ゆぞ及ぶべし某こも我も
 故小當麻太郎は獲れ負し當座に殺しくひひ死此度のゆりそれゆもま
 輒く腹はぐりゆあは彼鄙語我はあやうびや腹小脊ハ代ごとく大の虫を助
 へく小の虫を殺せといひ。愚意我のくまはとたれとや照時と指死しせ
 カ士をのくこも我刺せむ。彼りの密謀を頭の下我りちとや。彼はめく
 へく路みと心ひん自殺してひと幕下へ使えあけあやう君はささる。誰
 こが大人を疑へたあやうとたれ安達が恨もあつらう解さうんや照時の罪
 蒙りま。自殺せしとまうはとも所願はかまも召放されるん。こが大人私よの
 子ともの立ともあり。杖もあやうも。技持く親がむむらふ崇をうけ
 こが家は係は難きを獲るは徳を報ひるは渠が子どもはこもこの情
 由を後とまももあやうのくも只赤くさるべし。こが被小の虫を殺して大の

虫を助るも照時へこが母の一族は不便小思召べしと腹は背への
 邊とあやうもあやうも。こが向されはこもあやうも。時機は再度の難きを脱と
 踏みあやうも。共み扱め。時政吻と息つ死時が針策をへく
 こが意を稱へり。さるは被儀杖は。妻の後才をさるるけゆ引
 さる。かして再々何れせん足すかぬの死め。照時と召せよと
 誰か分付く。儀杖を刺まへた。この死時あやうを誰とと擇ぶま。ゆ
 のりも老當湯嶋李進基勝ハ巻法相撲の技ハ長く。十人かちるあま
 少く置れた當麻太郎とその師共ゆ。武藝を習ひ送よあけ。あはと
 勸るやあやうも。あやも件の密謀を案する。てあやうのあやう見
 あはひひあや。ともあやうも。耳詰の時政もあやうも。あは現かののこも

あるは、妻の太進の縁由を示し、長時に入を走じて、照時を召び、あ
いそとと焦燥の故の、方ハ基勝の流示ん、とく潜ち、蒸糠と推扇、七言の
か入走るとまり、長時ハ小棚なる料、希硯をさつとあり、遠く墨搦、
照時を招死よ、まる書状をア、あつとる、宿、又、習、某甲、走り、来、紙、口、の、透、り、
さ、一、紙、元、殿、の、其、処、より、ま、ま、と、刀、野、ど、の、ま、ま、と、と、告、り、成、め、時、政、を、
急、と、い、ひ、長、時、の、目、を、注、し、身、を、起、し、お、り、風、が、吹、せ、く、ま、ご、ろ、の、み、み、
と、や、ま、り、牧、の、方、ハ、基、勝、の、か、の、後、を、告、り、秋、の、ほ、し、と、い、ひ、し、り、け、て、書、院、の、
か、入、赴、け、ば、長、時、ハ、書、中、の、果、以、書、状、と、細、く、引、裂、け、推、因、り、て、袂、に、録、し、
遣、り、出、る、客、房、の、く、い、ひ、ぬ、え、る、宿、の、刀、野、儀、杖、照、時、ハ、西、三、日、更、分、さ、
執、持、の、安、不、成、同、也、この、急、り、成、賂、給、ん、と、く、後、者、ハ、と、首、界、一、と、い、は、れ、
諸、方、の、固、より、通、家、の、と、中、ハ、あ、り、後、口、より、進、入、り、當、番、の、若、堂、ハ、

口、も、さ、し、迎、へ、客、多、入、と、誘、引、し、且、の、中、に、成、ま、り、ん、と、く、出、居、の、く、入、退、り、お、ひ、
あ、り、と、く、も、く、奥、の、く、下、り、儀、杖、と、く、ま、ま、の、い、ぬ、さ、の、入、り、い、は、む、母、
對、面、の、い、ひ、ね、と、い、ひ、く、声、ハ、ま、は、し、く、長、時、ハ、照、時、ハ、阿、と、急、あ、り、刀、を、引、提、
し、み、も、さ、し、な、り、あ、り、と、い、ひ、く、宿、の、い、ひ、ひ、が、く、左、の、い、は、さ、り、る、金、屏、の、背、よ、り、
當、家、の、老、堂、湯、崎、基、勝、の、下、緒、を、禱、中、と、袴、の、後、と、高、く、取、り、蟲、の、さ、
飛、り、と、く、照、時、ハ、ま、い、と、組、む、と、狼、藉、や、と、照、時、ハ、振、解、ん、と、身、を、反、正、し、既、
利、の、を、取、り、と、く、さ、し、と、く、依、四、ひ、か、し、り、の、合、ま、り、が、箱、の、桃、が、板、の、力、も、
遙、よ、り、た、る、湯、崎、の、あ、り、入、依、り、照、時、を、つ、ら、し、く、軟、膚、丸、を、揉、み、一、腕、で、脊、
の、が、懸、り、短、刀、を、引、拔、く、頸、が、ん、と、ま、る、箱、ハ、反、張、り、あ、り、の、の、め、や、あ、ま、
けん、急、地、ハ、腕、麻、と、て、既、ハ、刀、を、さ、し、と、く、さ、り、の、が、さ、り、な、ら、し、け、る、隙、ハ、照、時、ハ、
伏、つ、も、腰、刀、を、引、拔、く、基、勝、ハ、太、股、より、小、腹、の、う、ま、い、と、刺、し、友、入、と、



父子
相謀て
賊時と
刺す

下の方

刀鴨子藤村

月夜内番

廿一

基勝ハハハハ。照時ハ政警を放さざりて刺さるる事引あげて申すや
 頭を掻てけり。さしども刃ハ項より及び照時ハ吃さる死切りて即座死す。
 基勝ハ深癩ふよりぬ長時ハたぬまら小薙刀と突立り間ちりまありて
 時政ハ次の房より基勝が移りてくる。為体を剛窺く。女を死かさせざる
 けり。かくて緯果より一ハ長時ハ忙しく近習のみの我召聚備杖ハ乱心さるる
 この刃まきまは箱小腰刀を引抜た。忽地ニ自殺し又湯崎基勝もか
 為体ハ驚刺抱た禁んとす。深癩と負ひぬ備杖ハ後者の老こちをぬ
 どもよこの越竊竊告て主の死體死せよし。さるる劇騒ぐべうさ
 一のあををぬさせ上と叮嚀ハ脱示せざるけりぬと一兩人外面へ走
 去則件の越刃野ハ後者ハ告りハ奥比呂末の固よりあるハ橋家
 通家より疑り老こちハ後者西三人許さるる奥入り。主の亡骸と

見る箱小腰時ハ正首小彼ハ威嚇め諭せし。後者ホハ一線示及びさるる
 の。中ハ穩俊のおん沙汰とあり。希ハ長時やめ。老こちハ亡骸と竹輿ハ
 乗し。等ハ選りて管中への越刃死あげよ。さるる又かくてさるるの死さるる
 執事ハ多んやと諭され。頼をつた。い。執事ハ庇ゆらるる。孺子小家
 賢と多んハ難死の中ハ幸ハ仰は後ひまうらんとさるる主の亡骸を駈て竹
 輿ハ担乗せし。奥首等へ入りけり。この一條ハかへりて深癩小ゆらるる湯
 嶋を勤る。めたり。時政ハ叮嚀ハこの苦痛と問慰め。側入のなる死
 ん。耳の何りハ口と下せ。汝ハあて。照時を組伏らると死連刺殺さる。瘡と
 負し。首を死落さる。自殺とさるるふいと。さるる有難小愧りん
 細方小眼或時。神旋てい。ども某既ハ照時ハの頸ハ搦んとさるる。死
 背のさる入あり。右の腕を破と撲ぬ。驚たさる。れ。目裏さる。さる。詐欺と。

明夷抄續卷三

管中へ自撰をなす。當麻太郎を弘く怪しむ。やどかりふりて不煙の如く見え
 たる。その機をさぐる。指の跡をたゞ癩麻まてく刃を引上り運る。けり。さ
 違ふ下より刺れり。瘻を看る。後。腕の筋を舊の玉くふる。しる。ば。彼人を
 刺り。し。の。ま。の。杓。枯。の。魚。の。音。よ。る。も。細。り。つ。その夜の霜と消くけり。
 時政の當麻が冤魂。基勝は宗とる。や。我。や。く。あ。ろ。又。愉。々。ば。美。時。の。ま。
 可。惜。を。の。て。我。殺。と。ま。り。た。小。器械。を。合。わ。た。る。う。づ。づ。う。ち。ま。め。の。は。に。を。
 ぞ。ふ。よ。あ。る。の。の。や。と。向。の。荒。介。と。う。ち。笑。ま。く。所。存。た。く。て。ま。い。へ。た。
 この條の密針の基勝。む。り。預。り。て。渠。腹。心。の。め。と。り。と。も。程。中。を。死。を
 心。ま。す。功。は。修。ま。く。主。を。侮。り。罷。衰。る。が。竊。小。恨。く。彼。密。謀。城。へ。告。げ。た。の
 折。成。り。と。基。勝。と。り。共。に。殺。ま。と。た。ら。や。ま。く。後。世。を。も。り。た。の。ん。この。由。を。よ
 某。へ。ん。の。深。癩。を。負。し。り。又。基。勝。が。目。小。つ。え。る。當。麻。太。郎。が。冤。魂。へ。渠。が。命
 数。と。ら。は。り。及。び。ひ。日。來。む。む。り。ひ。の。我。幻。よ。ん。の。は。の。長。則。迷。ひ。怪。め。ふ
 と。う。と。その。當。を。括。ひ。ぞ。く。群。小。答。ま。す。時。政。の。め。の。ま。も。小。勝。鼓。く。感。嘆。し。汝。の
 智。と。り。ひ。量。と。り。ひ。親。ゆ。の。迫。優。ま。し。け。ま。宿。願。の。汝。の。世。は。か。る。る。ば。成。就。せ。ん
 ぞ。く。私。語。ぬ。も。の。の。時。政。の。野。が。死。骸。成。女。ま。と。女。と。沐浴。し。て
 衣。裳。を。更。め。管。中。へ。あ。る。指。は。又。彼。の。野。が。家。臣。の。時。政。の。子。ある。太。郎。時。夏。が。使。者。と
 志。す。管。中。へ。上。り。主。の。自。殺。成。祈。ま。す。この。日。右。幕。下。頼。朝。の。指。色。三。郎。重。成。し。て
 刀。野。賊。時。を。さ。せ。む。ひ。の。政。勢。は。紛。ま。す。彼。人。の。邊。ま。我。外。の。有。る。安。達。藤。九。郎。盛
 長。の。機。嫌。を。や。め。し。め。ん。と。さ。ら。さ。れ。て。引。く。ま。わ。ん。と。又。私。に。催。促。し。て。死
 ころ。の。な。が。頻。々。焦。燥。の。も。この。日。西。へ。渡。る。比。乃。野。太。郎。が。祈。あ。り。執。権。時。政。の
 亦。来。り。て。照。時。自。殺。の。怨。成。せ。え。あ。げ。な。む。暮。下。の。廣。元。盛。長。亦。を。更。小。公。文

某へんの深癩を負しり。又基勝が目小つえる當麻太郎が冤魂へ渠が命
 数とらはり及びひ日來むむりひの我幻よんのはの長則迷ひ怪めふ
 とうとその當を括ひぞく群小答ます時政のめのまも小勝鼓く感嘆し汝の
 智とひ量とひ親ゆの迫優ましけま宿願の汝の世はかるるば成就せん
 ぞく私語ぬものの時政の野が死骸成女まと女と沐浴して
 衣裳を更め管中へある指は又彼の野が家臣の時政の子ある太郎時夏が使者と
 志す管中へ上り主の自殺成祈ますこの日右幕下頼朝の指色三郎重成し
 刀野賊時をさせむひの政勢は紛ます彼人の邊ま我外の有る安達藤九郎盛
 長の機嫌をやめしめんとさらされて引くまわんと又私に催促して死
 ころのなが頻々焦燥のもこの日西へ渡る比乃野太郎が祈あり執権時政の
 亦来りて照時自殺の怨成せえあげなむ暮下の廣元盛長亦を更小公文

所は召集く件の新を御決め又時政廣元は範頼の送物方。ゆゑの首級と後
 朝臣の送書成らせりし。幡太の前と安達が使敷俊が横死する。照時が罪
 あり。ご死緯の趣が告受へ。時政は今なめて。ご死緯はかゝりて。対
 文よりち敬もたかま。備杖照時へ緯幾光。とをぞ知く。脱も路乃る死
 故。刃又伏するのたのべ。盛長も愛女を執せ。送恨やう。このうら
 こ。私のうらむら。照時が野めさる。かじ。渠蒲敷小宿怒あり。又盛長の
 意趣あり。欽とま。かま。緯幾は昔は罪あり。と。理非平げ。よ
 断やせ。廣元霎時沈吟。志る。と。い。ど。分明。照時既死。よ
 罪科一等を宥ら。志る。う。わ。と。や。け。り。野太郎が使者。よ。の。後
 廣通。兵卒の名を尋。渠。賊時が後才。青日舟九郎
 綱道とのめ。か。且時夏。か。上。貞。か。て。て。

その使者を遣へ。幡太の首級を。安達藤九郎は。の。首級と後
 朝臣の送書成らせりし。幡太の前と安達が使敷俊が横死する。照時が罪
 あり。ご死緯の趣が告受へ。時政は今なめて。ご死緯はかゝりて。対
 文よりち敬もたかま。備杖照時へ緯幾光。とをぞ知く。脱も路乃る死
 故。刃又伏するのたのべ。盛長も愛女を執せ。送恨やう。このうら
 こ。私のうらむら。照時が野めさる。かじ。渠蒲敷小宿怒あり。又盛長の
 意趣あり。欽とま。かま。緯幾は昔は罪あり。と。理非平げ。よ
 断やせ。廣元霎時沈吟。志る。と。い。ど。分明。照時既死。よ
 罪科一等を宥ら。志る。う。わ。と。や。け。り。野太郎が使者。よ。の。後
 廣通。兵卒の名を尋。渠。賊時が後才。青日舟九郎
 綱道とのめ。か。且時夏。か。上。貞。か。て。て。

